

俳句に詠まれた那須 (2)

— 日本の近代化と西洋化の反映 —

松 井 貴 子

はじめに

本稿は、「俳句に詠まれた那須—日本の近代化と西洋化の反映」の続編である。栃木県的那須地域で詠まれた俳句を、「那須俳句」として、近代化と西洋化という視点から、読み解き、前号では、以下の内容で考察した。

I 近代日本の西洋受容にみる那須俳句

1 俳句の近代化—改暦と写生

2 那須俳句に詠まれた近代の事物

(1) 自然の中の近代的人工物／電車、バス、飛行機、灯り、プール

(2) 日常生活に近代の事物が入り込む／学校教育、戦争、医学、選挙、キリスト教

II 那須俳句に特徴的な西洋近代

1 牧場の牛、馬、御用邸

(1) 牧場／酪農、牛

(2) 馬／軍馬、荷馬、農耕馬

(3) 天皇 御用邸

本稿では、那須の自然を詠んだ俳句、近代日本になっても継承されている那須の伝統を詠んだ俳句について考察を進める。⁶⁷

2 那須俳句の自然

俳句は自然を詠むことが基本である。人間は自然の一部として存在している。江戸俳諧では、そのような人間を主体として詠んだ句が好まれるようになり、近代俳句では、人事句も自然句と同じく、創作され、鑑賞されている。しかし、那須には、明治時代以降も、句材となる自然が壊されないで在り続けた。開拓や開発によって人が入り込み、自然を改変することが行われても、それに凌駕されない自然の大きさが、那須にはあると思われる。人々が自然を大切に思う気持ちとともに、那須の

近代の自然は、俳句に詠まれ続けている。

(1) 景色／変わらず存在しているもの、存在し続けているもの

江戸時代、芭蕉が、奥の細道の旅で那須を訪れた。芭蕉に続き、江戸俳諧中興の俳人である蕪村も那須の名所を詠んでいる。その後、明治時代生まれの俳人も、近代俳句として那須を詠んでいる。

石の香や夏草赤く露白し 芭蕉（殺生石）⁶⁸

殺生石は、芭蕉の時代も、火山ガスを放っていた。芭蕉は、奥の細道で、石の毒気がまだ消えないでいると記している。石の上を飛ぶ虫も鳥も殺してしまう殺生石の妖力によって、緑のはずの夏草が赤くなり、秋の季語で儂さや冷やかさを感じさせる露があつさ（暑さ、熱さ）を感じさせるものになっている。

柳散り清水涸れ石処々 蕪村（遊行柳）⁶⁹

蕪村は、俳諧宗匠（俳人）であると同時に、絵師（画家）でもあった。蕪村の句は絵画的である。言葉で表現されたものを、絵のように視覚的に再構成することができる。現前するのは、柳の枝の動き、柳葉が散って地に落ちるまでの時間の経過、流れる水が枯れていくつもの石が顔を出している様子である。「清水涸れ」の表現によって、今は見えない水量豊かな流れも記憶の中の像として呼び起こしている。

日出で、那須野ヶ原は霧の海 山口青邨（那須野ヶ原）⁷⁰

那須野ヶ原に一面に霧が立ち込めている。その様子を、昇り来る秋の日射しが、明らかにする。「日出で、」には、那須野ヶ原に日の光を行き渡らせるに足るまで日が昇って来るのに要した時間の経

過が存在している。子規以来の近代俳句の技法を取り込みながらも、細かな視覚的描写を追求することを第一としない青邨句には古典的な風情がある。「霧の海」とすることで、那須野ヶ原の広大さが静かに表現されている。

風なぶるつつじつつじや那須の原 阿波野青畝（那須野ヶ原）⁷¹

近代俳句の主要理念である写生は、その語が、一般的に意味する通り、美術に関連している。子規が美術の写生を文学の写生とすると、絵画では表現することが難しいものを表現することが企図された。その一つが動きの表現である。この句では、「風なぶる」で、物の動きが始まり、「つつじ」の語を反復することで、風によって動きを起こされたつつじの動きが波のように伝わって継続していることが表現されている。切れ字「や」が使われていること、景色の描写において絵画のような構図のある構成をしていないことで古典的な作風になっている。

那須野原檜山杉山座禅草 鶴見一石子（栃木ふるさと名句選・春）⁷²

すべて漢字で作られた句である。かつて、芭蕉が漢詩文調の句を作っていた時期には、漢字使用の多い句が作られていた。この句は、漢文訓読をする必要はないが、漢語を多用していた芭蕉句の影が感じられる。句の構成は、「那須野原」という場の設定があって、そこに「檜山」「杉山」と連山を大づかみにとらえて配置した上で、「座禅草」という地表近くに存在する小さな植物に焦点を集約している。句材の配置と視点の動きは近代俳句的である。

(2) 絵画的写生／近代の技法で詠む風景

近代俳句を特徴づけるのは、正岡子規が提唱した「写生」である。子規は、美術理論を文学に適用した。その写生理論には、俳句表現において意識することとして、構図、色彩、動き、印象明瞭が要点としてある。

麦架けて那須野ヶ原の一軒家 富安風生（那須野ヶ原）⁷³

子規の写生では、絵画的な構図を俳句に表現することが、それまでにない新しい技法であった。この句では、刈り取った麦を乾燥させている眼前の近景に焦点が合わせられている。そこから、広い那須野ヶ原の遠景へと視点が動き、再び、麦を干す近景の方に視線が戻り、そこが、たった一軒の農家であったことが明らかになる。作者の意図のままに読者の視線を導くことができるのは、絵画にはない文学作品の利点である。

四囲の山低めて那須の稲架幾重 奥平考声（芦野・伊王野）⁷⁴

那須には雄大な連山がある。高原を囲む山々には高さもある。実った稲を刈り取った後、乾燥させるために、稲架掛けをして刈田に置く。稲架掛けには、土地ごとに多様なやり方がある。田によって異なったり、家ごとのやり方が継承されている稲架掛けもある。田を囲む那須連山と田の稲架は、実際には、かけ離れた高さ、大きさの違いがある。稲架をいくら高く重ね上げても、山の高さは何の影響もない。しかし、山と稲架の関係を、稲架に注目する主観的視覚で捉えるとき、稲架の存在感は飛躍的に大きくなり、相対的に、山の高ささえも、それまでとは違う感覚で把握することになるのである。

下野の国の那須野のたんぼぼ黄 後藤比奈夫（那須野）⁷⁵

写生を考えると、色は重要な働きをするもののひとつである。子規は、色彩の効果として、印象明瞭を考えていた。この句では、下野の国から那須野へと視野が絞られ、焦点化されて、最終的に、たんぼぼへと集中している。「たんぼぼ」の語だけでも、黄色は意識されるが、それを、「黄」という一文字の漢字で明確に提示して句を結ぶことで、印象明瞭の効果が出ている。たんぼぼの群生で視点を留めるか、そのなかの一輪にまで焦点を絞るか、両様の解釈の可能性があり、読者は複数の作品世界を楽しむことができる。

那須野路や行きては戻るいなびかり 桜岡素子（那須野路）⁷⁶

北関東に属する栃木県は雷の多い土地である。

雷は、その存在感を、ときに恐怖感を伴わせて、音とともに、光によっても、人に知らせてくる。雷光は、稲光（いなびかり）とも、稲妻（いなづま）とも言う。雷は、文字通り、稲作に縁がある。雷によって稲の生長が促されると考えられているのである。作者は、那須野を移動しながら、野の広がりそのままに、雷光が自在に広がり動く様子を捉えている。「いなびかり」と、ひらがな表記にしているのは、雷が、怖いだけのものではないことを知る作者の感覚によるものであろう。

雪那須のくわと眼をひらく春の晴れ 平井照敏（那須）⁷⁷

「くわ」という語は、子規の随筆「飯待つ間」の結びとなる一行「くワツと疊の上に日がさした。飯が来た。」⁷⁸を思い起こさせる。「飯待つ間」は、印象明瞭の効果を提示した写生文として書かれている。「眼をひらく」のは雪の残る那須である。擬人法によって、春の訪れを印象づけている。弱々しげな冬の日射しとは異なり、明るい春の日射しは、生命力を感じさせる。鮮やかな光の反射を見せる那須に春の目覚めを感じたのである。

雪晴に次の噴煙なげ出され 平畑静塔（茶臼岳）⁷⁹

茶臼岳は活火山である。活動する火山には動きがある。火山の内部の動きが外に現れるものが一つは噴煙である。雪が止んで、晴れてきて、視界がよくなったときに、噴煙が間欠的に出てきている様子を「投げ出され」と形容している。ここには、地中の熱を持って吹き上がる煙と大地に降り積もった雪の冷たさの対比が見出されている。

早春の大工釘打ちつづきけり 小野英（栃木ふるさと名句選・春）⁸⁰

大工が釘を打っているのは建築現場である。建築中であれば、環境は屋外と変わらず、暖房もままならない上に、火災防止のため火気厳禁である。春まだ浅い現場は、寒さを感じるに違いない。休むことなく釘を打ち続けるのは、寒さをもものともせずであろうか、それとも、体を動かし続けることで、寒さを感じないようにしているのであろうか、いずれとも決め難い句である。「打ちつづき

けり」と明確に時間の経過が示されているのが、美術の絵画的写生と異なる文学の写生の特徴である。

梨を食べのこして大工叩く叩く 天野弥生（栃木ふるさと名句選・秋）⁸¹

梨は、建築を依頼した施主からの差し入れであろうか。肉体労働に疲れた身体を癒してくれるものである。梨を食べるために一休みしたが、味わって食べきるほどにゆっくりと休むことはなく、すぐに仕事を再開し、さらにパワーアップして、釘打ち、あるいは、木組みの作業を続けている。「叩く叩く」という同じ語を繰り返す表現によって、力強い動作が繰り返される様子と、それが継続している時間の経過が描写されている。

遠く近く祭りばやしの厨ごと 石崎蘭風（栃木ふるさと名句選・夏）⁸²

厨は台所のことである。厨ごと、すなわち台所仕事は、日々、家で行われる。祭礼の日⁸³でも、変わらず家事はある。祭りの日には、お囃子を乗せた山車が町中を回る。その囃子の音が聞こえてきた。昔の日本家屋の台所で、屋外に開かれた作りであれば、外の音はとともよく聞こえたことであろう。祭りの囃子方が奏でる音楽は、耳に親しんだ音、子供の頃から、毎年、変わらず聞いていた祭りの音である。祭りの場にいた思い出を甦らせてくれる音でもある。囃子の音色の大きさや強弱の変化を細やかに聞き分けて、山車がどこの通りを、そのように進んでいるか、その動きまでも想像して楽しんでいるのであろう。

3 変わらない那須

近代になっても那須に伝わっているものに、神社の縁起でもある狐の伝説がある。この伝説は、殺生石の伝説となり、それを元に謡曲が作られている。古くから、那須が豊かな温泉地であったことの証である。温泉は今も湧出し続け、殺生石とともに、観光業に寄与している。

(1) 伝説／狐

那須に関わる伝説として「九尾の狐」伝説があり、玉藻稲荷神社の縁起になっている。大田原市

にある玉藻稲荷神社は、京都の伏見稲荷大社を総本社としている。この伝説では、九本の尾を持つ狐が「玉藻の前」という美女に化身し、帝に寵愛された。帝の病快癒のために陰陽師が祈祷をしたところ、正体が狐であることが、ばれてしまったため、天空を飛んで逃げ出した。そして、蟬に化身して桜の木に隠れたが、その真の姿が、鏡が池に映っていたため、追手に討たれてしまった。この鏡が池は、今も清冽な湧水に満ちて、移り変わる季節の風景を映しているという。⁸⁴

音絶ちし墳^{はか}は玉藻の木下闇 鷺谷七菜子（玉藻稲荷）⁸⁵

玉藻の墳は、狐塚である。正体が暴かれた九尾の狐がここで息絶えたという。玉藻稲荷神社の北にあり、現在は、狐塚之址という小さな碑が建てられている。木下闇は夏の季語で、夏の日差しが強烈である分、木陰の暗さが際立ち、闇のように感じられるということの意味している。絶たれた音は、蟬に化身したときの鳴き声であろうか。明るさの陰にある暗さ、その深さと強さが伝説の名残を伝えているのである。

空蟬の中へ空気の入れかはる 寺内幸子（栃木ふるさと名句選・夏）⁸⁶

空蟬は蟬の抜け殻である。この世の無常や命の儚さとともに、大切なものが何も残っていないこと、空虚な残念さや空しさを象徴している。妖狐は蟬となって、桜の木に隠れて身を守ろうとしたが、自分の真の姿を映し出してしまう池の水面の存在に思い至ることができず、命を絶たれた。木々を渡る風が、妖狐伝説を今に伝えている。

尾を出して那須の芒の狐色 青柳志解樹（那須）⁸⁷

芒は別名尾花という。穂先が動物の尻尾のように見えることから、その名がついたという。たくさんの芒の穂が視界に入ってきたとき、尾花という別名の通り、動物が尾を出してきたように見えた。そして、その芒の色が、那須の地に育ったものであることから、狐の毛色のような色に見えた。狐の連想から、那須らしさを感じているのである。

那須野にて見るは狐の尾花かな 未求（那須野）⁸⁸

作者の未求は、俳号に姓がなく、名のみであることから、江戸時代の俳人であることが推測される。那須と狐と尾花（芒）が取り合わされた句である。前掲の青柳志解樹の「尾を出して」の句に先行する句の一つである。「見るは」と、実体験であることを明示する詠み方に、近代に写生俳句が主流となる以前の、近世俳諧らしさが感じられる。

馬草負ふ人を枝折の夏野かな 芭蕉（那須野）⁸⁹

玉藻稲荷神社⁹⁰は、奥の細道で芭蕉が訪れた地でもある。外から訪れる人のない土地では、旅人のための道標がない。芭蕉は、馬草を背負っている地元の人を頼りに旅を続けた。この句は、そのことを詠んだものである。神社内に、この句を刻んだ芭蕉句碑が建てられている。

黒羽や梅雨の昏^{くら}みに野干^{やかん}出む 大橋敦子（黒羽町）⁹¹

野干は狐の異名である。能に「野干」という演目があるという。現行曲の「殺生石」に類する曲であろう。下野国の三浦之介という武人が、野干を退治した後、那須野が原で野干の亡霊を吊って成仏させる、という内容で、現在は廃曲になっている。古来、繰り返し世に現れた妖狐の野干が、現世に再び現れて暗躍しそうな黒羽の梅雨である。

(2) 殺生石／西洋に対峙する

九尾の狐は、日本（平安時代末期、鳥羽上皇）の他、中国（殷、周、唐）、インド（天竺）などの帝に仕えて悪事を尽くした妖狐とされている。討たれた狐は石になり、毒を發して近づく者の命を奪ったため、後に、高僧玄翁によって、打ち砕かれ、その欠片が日本中に飛散したという。

この伝説は、能「殺生石」になっている。玉藻の前の亡霊が過去を語り、討たれた後も、この世に残った魂が石に取り憑いて殺生石になったことを高僧玄翁に告げる。そして、玉藻の前の亡霊は、狐の精霊となって、割れた殺生石の中から現れるが、玄翁によって仏法を授けられたことで、悪事

を働かないことを約束して消える。このような救済は能に多く描かれている。

薄暑かく殺生石を匂はしむ 藤田湘子（殺生石）⁹²

薄暑は、初夏の、まだ厳しくはない暑さのことである。気温が上がると、ものの匂いは強くなる。殺生石は、生き物を殺す毒を出し、周囲に特異な臭気を発散している。それは、季節を構わない火山活動による現象であるが、人の嗅覚は、夏になる早々から、この火山ガスの異臭に、より強く刺激される。日本が近代化しても、西洋化しても、殺生石の存在は変わらないのである。

蜜柑ひとつころがり殺生石暮る 速水虎之助（殺生石）⁹³

殺生石を特徴づけているのは、毒を含んだ異臭である。その場所で転がり落ちた蜜柑もまた人の嗅覚を刺激する香りを持っている。暮れ方の殺生石で、人の視覚が鈍っていても、蜜柑は、その香りによって、自らの存在を訴えかけてくる。異臭と香気を嗅ぎ分ける嗅覚は、鼻に届く香りの微妙な変化によって、転がる蜜柑の動きも捉えることができるであろう。かつて、梅の花が暗闇でも、その存在が感知されて、和歌に詠まれたように、日本人の嗅覚は、俳句にも活かしている。

元日の殺生石のにはほひかな 石田波郷（殺生石）⁹⁴

太平洋戦争が始まった昭和十六年十二月、その年末年始に、波郷は、那須に滞在した。殺生石は、元日も変わらず毒のある異臭を放っていた。都会の空気に慣れた鼻が、那須の山中の空気と殺生石のまわりの空気との大いなる差を印象的に感じたという。正月らしい句ではないと、自ら述べている句であるが、対米戦に入ったという情勢が影響しているのかもしれない。

ほのぼのと殺生石の二日かな 上田五千石（殺生石）⁹⁵

那須で作られた六句のうちの一句で、「二日」という季語によって、那須にまだ雪があることを示したものであるという。「ほのぼの」という語には、

夜が明け始めるときの僅かな明るさと、ほのかな暖かみという意味がある。火山ガスが出ている殺生石一帯には地熱があり、雪が解かされている様子を「ほのぼのと」と表現したと思われるが、「殺生石」と、「ほのぼのと」とは素直には結びつかない。近世俳諧を思い起こさせるような難解な句法である。

香水の身にて殺生石に寄る 吉野義子（殺生石）⁹⁶

香料や香油の歴史は古代に遡り、現代につながる香水は、ルネサンス期のヨーロッパで作られたという。日本における香水は、明治時代以降の近代のものである。天然香料に合成香料が加わることで、香水は、飛躍的に種類が増え、安定した香りを長い時間漂わせるようになった。それを身にまもって殺生石に近づいている。香料成分の多彩さと強さを持って、殺生石の臭気に対抗しようとしているかのようなのである。人の命より遥かに長い時間、放出し続けた火山ガスを凌駕しようというのは、人為に作り出された化学物質である。自然と人工の対比は、西洋と日本、近代と前近代の対比に重なる。

(3) 温泉／近代になっても存続

那須連山の主峰茶臼岳の山腹に那須温泉郷がある。その発見は奈良時代に遡り、江戸時代には、元湯の鹿の湯に続いて発見された六湯を加えて那須七湯として知られ、湯治場として高く評価されていた。明治、大正時代にも新たに温泉が発見され、新那須温泉も作られている。近代になって、鉄道、道路が整備されて、温泉街が形成され、さらに、太平洋戦争後の高度経済成長、高速道路、新幹線の開通によって、那須温泉は観光地、別荘地となった。⁹⁷

ここにして元湯噴き上げ遅つつじ 大津希水（那須温泉）⁹⁸

那須温泉の元湯には「鹿の湯」がある。その歴史は、飛鳥時代に遡り、江戸時代には、芭蕉が奥の細道の途上で立ち寄った。現在の建物は明治大正時代のものを伝えている。⁹⁹ 源泉からの湯は、泉質が濃く、湯温が高く、湧出する勢いも激しく感

じられる。湯の効能を強く身に受けることができるであろう。那須の湯元には八幡つつじ園地¹⁰⁰がある。標高1100mの23haの土地に20万本のヤマツツジが群生し、五月中旬から六月中旬に見頃になる。高原では平地より花期が遅い。元湯と高原つつじ、人工物にあふれた平地での日常を離れた非日常の楽しみである。

夏霧や我が漬かる温泉の面を這ふ 松根東洋城（新那須温泉）¹⁰¹

東洋城は、明治から昭和前期まで、日本の近代とともに活躍した俳人である。近代都市となった東京を離れて、那須の湯を楽しむことは、彼の身に受け継がれた前近代の遺風を懐かしむ機会ともなったであろう。句に詠まれているのは、温泉に浸り、夏の霧に包まれた我が身である。そこには、近代が作り出した人工物は存在していない。

凍つる夜の湯滝に打たれ来て眠る 宮下翠舟（北温泉）¹⁰²

冬の夜の凍てつく空気と、滝のように落ちてくる温泉の湯の熱さが対比されている。北の湯の湯滝は「不動の湯」という打たせ湯で、黒不動（元禄四年、1692年建立）が祀られているという。¹⁰³ 不動は不動明王のことで、密教の根本尊大日如来の化身である。黒色は中国の陰陽五行説では冬に対応する。お不動さんの加護を得て、俗世の煩惱を祓い、快い湯疲れのなかに眠りにつく。日本政府が主導した西洋受容による近代化を経ても、日本の古くからの信仰は失われないのである。

稲妻や谷の深きに湯船の灯 寺田寅彦（塩原温泉）¹⁰⁴

塩原温泉は、那須野が原の北西、箒川の溪谷沿いにある。温泉の発見は平安時代(806年)に遡る。塩原十一湯(とう)と呼ばれ、源泉が150か所あり、泉質は6種類、湯の色は7色あるという。¹⁰⁵ 稲妻の光は、山間の温泉郷に瞬時の明るさをもたらす。空を走る稲光の下には、温泉宿の部屋、内湯、露天湯の灯りがある。人工の灯りは、人が必要とする限り灯り続ける。その明るさゆえに、谷全体に広がる闇の暗さが際立つのである。

樋四散して湯元あり山眠る 皆吉爽雨（那須温泉）¹⁰⁶

那須温泉の元湯鹿の湯は、現在でも複数の温泉宿に湯を提供している。¹⁰⁷ 引き湯の樋が、それぞれの宿に向かって延びていて、その起点は、源泉のある湯元である。鹿の湯の背後には山がある。冬の山は、落葉樹が葉を落とし、生命活動が停止しているようになり、動物たちも冬眠し、動きのない静かな状態になる。それを形容する季語が、「山眠る」である。山笑う春、山滴る夏、山装う秋、に続く、山眠る冬、太古の昔から繰り返されてきた自然の循環である。

温泉げむりに橋ほのぬくし冬紅葉 西本一都（那須温泉）¹⁰⁸

鹿の湯の傍らに湯川が流れている。その橋を渡るとき、ほのかな暖かさが感じられるのは、源泉脇の湯川ならではである。冬紅葉は、彩りが失われた冬の景色に、鮮やかな存在感を呈する。湯川に散り落ちる冬紅葉は、紅色や黄色の点描で水面を彩り、橋を渡る人の目を楽しませる。

おわりに

本稿の土台となった那須文化セミナーのタイトルは、「那須と文学—作品に込められた那須の魅力とは—」で、テーマとして提示されたのは、「なぜ那須を訪れたのか・なぜ作品に那須を描いたのか・那須の自然の魅力なのか・西洋文化への違和感と地方の自然に重ねられた文学者たちの思いとは・旅と文学など」であった。その連続セミナーの一環として、「俳句に詠まれた那須」を考察した。

那須で詠まれた近代俳句は、明治維新から文明開化、殖産興業、富国強兵などの国家の歴史的な変革のなかで起こってきた変化の様相を伝えている。

先祖代々、守り伝えてきた実り豊かな自然に、近代の産物は容赦なく侵入し、定着した。人々の生活は、学校教育を始めとして、近代日本が制定した様々な制度によって、改変を余儀なくされた。これは、那須に住む人々も、那須を訪れる人々も、近代国家として発展した日本の変化として共有できるものである。

俳句に詠まれた那須は、どのような変化が起

こっても、それを包含し、融和する。近代的な変化を、日常の一部として定常化する傍らで、前近代からの伝統は、変わらない日常として引き継がれている。有史以来の温泉や、古典作品にもなっている伝説は、観光産業とつながりを持ちつつ、現代生活においても、存在感を保っている。

近代の日本では、外からの刺激、外圧によって否応なく変化が引き起こされた。それは、国家体制を変えるほどの変化であった。その変化が、ゆるやかに人々の日常に入り、融和して、定着していったのである。歴史的な時間が経過するなかで、社会、文化の変化が継続的に起こり、近代日本に生きる人々の生活の様相が、那須で詠まれた俳句に詠まれた。俳句に詠まれたことで、那須らしい特質が端的に表れている。

⁶⁷ 註の番号は、前号からの通し番号にしている。

⁶⁸ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁶⁹ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁷⁰ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁷¹ 『関東ふるさと大歳時記』 399 頁

⁷² 『関東ふるさと大歳時記』 408 頁

⁷³ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁷⁴ 『栃木吟行案内』 108 頁

⁷⁵ 『関東ふるさと大歳時記』 399 頁

⁷⁶ 『関東ふるさと大歳時記』 399 頁

⁷⁷ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

⁷⁸ 『子規全集』 336 頁

⁷⁹ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁸⁰ 『関東ふるさと大歳時記』 408 頁

⁸¹ 『関東ふるさと大歳時記』 409 頁

⁸² 『関東ふるさと大歳時記』 408 頁

⁸³ この句に詠まれた祭りは、伊王野温泉神社の付け祭りであると思われる。十一月三日を本祭り、その前日を宵祭り、後日を裏祭りとして、上町若連（三十歳までの青年）と下町祭典保存会（はやし保存会）によって実行される。上町と下町の囃子方をそれぞれの山車（彫刻屋台）に乗せて町内を牽き回す。囃子は、大太鼓、小太鼓、笛、大鼓、小鼓、摺り鉦などで、十一曲が伝承されている。年間を通じて練習し、子供達が継承できるように伝えている。

関連 HP

「伊王野温泉神社の付け祭り」 那須町の文化遺産 HP 那須町文化協会 <http://nasu-bunka.jp/053/> 2020・6・15 日

「伊王野温泉神社付け祭りとは」 伊王野若連の付け祭り HP <https://ionomatsuri.com/about> 2020・6・15 日

⁸⁴ 「黒羽」『栃木吟行案内』 112 頁

⁸⁵ 『関東ふるさと大歳時記』 401 頁

⁸⁶ 『関東ふるさと大歳時記』 408 頁

⁸⁷ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

⁸⁸ 『関東ふるさと大歳時記』 399 頁

⁸⁹ 『関東ふるさと大歳時記』 399 頁

⁹⁰ 「玉藻稲荷神社」大田原市観光協会 HP https://www.ohtawara.info/spot_detail.html?id=32 2020・5・10 日

⁹¹ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹² 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹³ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹⁴ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹⁵ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹⁶ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

⁹⁷ 「温泉と歴史」那須温泉 HP 那須温泉旅館協同組合 <http://www.nasuonsen.com/history/> 2020・5・11 日

⁹⁸ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

⁹⁹ 鹿の湯 HP <http://www.shikanoyu.jp/> 2020・6・24 日

¹⁰⁰ とちぎ旅ネット HP 栃木県観光物産協会 <https://www.tochigiji.or.jp/spot/7053/> 2020・6・24 日

「那須・甲子 日光国立公園」国立公園へ出かけよう！ HP 環境省 <https://www.env.go.jp/park/guide/nasu/recommend/03.html> 2020・6・24 日

¹⁰¹ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

¹⁰² 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

¹⁰³ 「お風呂案内」北温泉公式サイト HP <http://www.kitaonsen.com/mokuj.htm> 2020・6・25 日

¹⁰⁴ 『関東ふるさと大歳時記』 400 頁

¹⁰⁵ 「源泉遺産塩原温泉郷」塩原温泉郷公式 HP <http://www.siobara.or.jp/> 2020・6・25 日

¹⁰⁶ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

¹⁰⁷ 那須町観光ガイド 那須町観光協会オフィシャルサイト HP <https://www.nasukogen.org/spotsearch/spot.php?cate=E> 2020・6・25 日

¹⁰⁸ 『関東ふるさと大歳時記』 398 頁

参考文献

加藤楸邨、角川文化振興財団編 ふるさと大歳時記 2 『関東ふるさと大歳時記』平成 3・6 角川書店

水沼三郎他編 『栃木吟行案内 吟行案内シリーズ ⑰』平成 11・7 俳人協会

落合雄三他編 『栃木県近代文学アルバム』平成 12・7 栃木県文化協会・随想舎

加藤楸邨・大谷徳藏・井本農一監修、尾形仵・草間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭編 『俳文学大辞典』平成 7・10 角川書店

平井照敏編 『新歳時記（春）』平成元・3、平成 8・12 改訂版 河出書房新社

平井照敏編 『新歳時記（夏）』平成元・6、平成 8・12 改訂版 河出書房新社

平井照敏編 『新歳時記（秋）』平成元・8、平成 8・12 改訂版 河出書房新社

平井照敏編 『新歳時記（冬）』平成元・10 初版、平成 8・12 改訂版 河出書房新社

平井照敏編『新歳時記（新年）』平成2・1初版、平成8・12改訂版 河出書房新社
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 春』昭和48・4初版、昭和52・107版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 夏』昭和48・7初版、昭和52・107版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 秋』昭和48・9初版、昭和53・26版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 冬』昭和48・10、昭和52・106版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 新年』昭和48・11、昭和53・25版 角川書店
 正岡子規「飯待つ間」「ホトトギス」明治32・10『子規全集』第12巻 昭和55・10 講談社 335 - 337頁

俳人一覧

芭蕉（松尾芭蕉）

正保元（1644）年、伊賀国（三重県）生まれ。元禄7（1694）年没。伊勢国藤堂藩に仕え、俳諧に励んだ。主君と死別後、江戸に行き、俳諧師となる。延宝5（1677）年、宗匠として独立した。貞門、談林、漢詩文調を経て、歌枕を巡る風狂の旅を通して、蕉風俳諧を樹立した。（『俳文学大辞典』741 - 742頁）

蕪村（与謝蕪村）

享保元（1716）年、自称摂津国（大阪市）生まれ。天明3（1783）年没。画を狩野派に学び、山水画、歴史画、花鳥画を描いた。俳諧は巴人を師とし、明和7（1770）年、巴人の夜半亭を継承して、俳諧宗匠となった。句風のキーワードは、人事、物語、童話、軽口、滑稽、写実、古典、浪漫、二重性と多岐にわたる。（『俳文学大辞典』810 - 811頁）

山口青邨

明治25（1892）年、盛岡市生まれ。昭和63（1988）年没。大正11（1922）年、高浜虚子に師事し、東大俳句会を興した。昭和5（1930）年、「ホトトギス」巻頭となり、盛岡で「夏草」を創刊主宰した。青邨の生涯文学一代論により、没後、「夏草」は、平成3（1991）年に終刊した。（『俳文学大辞典』926 - 927頁）

鶴見一石子

鶴見一石子は、宇都宮市在住で、「白魚火」の無鑑査同人（結社幹部）である。「白魚火」は、鳥根県出雲市の俳誌で、師系は富安風生（「若葉」主宰）、現在の主宰は白岩敏秀である。（「白魚火」HP <http://www.shirawobi.com/index.html> 2020・5・24日）

富安風生

明治18（1885）年、愛知県生まれ。昭和54（1979）年没。大正7（1918）年、吉岡禅寺洞により本格的に俳句に取り組む。「ホトトギス」、東大俳句会で活動し、昭和3（1928）年から「若葉」を主宰した。句風は、軽妙、機知から、心境、老境俳句へと変化した。（『俳文学大辞典』624頁）

桜岡素子

昭和7（1932）年生まれ。『野の花 桜岡素子句集』（1992・8 本阿弥書店）がある。（国立国会図書館HP <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000002203794-00> 2020・5・24日）

平井照敏

昭和6（1931）年、東京生まれ。平成15（2003）年没。師系は加藤楸邨で、昭和49（1974）年、俳誌「楨」を創刊主宰した。（『俳文学大辞典』792頁）

平畑静塔

明治38（1905）年、和歌山県生まれ。平成9（1997）年没。大正15（1926）年、京大三高俳句会で鈴鹿野風呂に師事し、「京鹿子」の他、「ホトトギス」「馬酔木」に投句した。昭和8（1933）年、「京大俳句」を創刊編集したが、昭和15（1940）年、京大俳句事件で検挙された。昭和23（1948）年、山口誓子を擁して、橋本多佳子と「天狼」を創刊した。昭和37（1962）年、宇都宮市に移住した。（『俳文学大辞典』793頁）

鷺谷七菜子

大正12（1923）年、大阪生まれ。平成30（2018）年没。高等女学校在学中から俳句に興味を持ち、昭和17（1942）年から水原秋桜子の「馬酔木」に、投句した。昭和21（1946）年から山口草堂の「南風」に投句し、草堂没後、主宰を継承した。（『俳文学大辞典』1008頁）

青柳志解樹

昭和4(1929)年、長野県生まれ。原石鼎が創刊した「鹿火屋」に昭和32(1957)年に入会して、原コウ子に師事し、同人を経て、昭和54(1979)年、「山暦」を創刊主宰した。昭和58(1983)年に造園業を廃業し、文筆に専念する。平成4(1992)年、俳人協会賞を受賞した。(『俳文学大辞典』5頁)

大橋敦子

大正13(1924)年、福井県生まれ。平成26(2014)年没。昭和20(1945)年頃から、俳人の父大橋桜坡おうはし子に師事し、昭和24(1949)年、「雨月」創刊から編集を担当し、父の没後、主宰を継承した。(『俳文学大辞典』115頁)

速水虎之助

栃木英語教育研究会(中学、高校、大学の英語教師の会)の会長が同名である。「英語と日本語で25市町の紹介 栃木県英語教育研究会が最後の活動」下野新聞HP <https://www.shimotsuke.co.jp/articles/-/4283> 2020・5・24日)

石田波郷

大正2(1914)年、愛媛県生まれ。昭和44(1969)年没。昭和5(1930)年、「馬酔木」に入会し、編集担当、同人となっていた。昭和12(1937)年、石塚友二と「鶴」を創刊し、主宰となった。中村草田男、加藤楸邨とともに人間探求派と称される。昭和44(1969)年に芸術選奨文部大臣賞を受賞した。(『俳文学大辞典』40-41頁)

上田五千石

昭和8(1933)年、東京生まれ。平成9(1997)年没。昭和29(1952)年、秋元不死男に師事して、「氷海」「天狼」に投句し、「子午線」に参加した。昭和43(1968)年に俳人協会賞を受賞し、昭和48(1972)年に「畔」を創刊主宰した。(『俳文学大辞典』74頁)

吉野義子

大正4(1915)年台湾生まれ。平成22(2010)年没。昭和23(1948)年、「濱」に入会して大野林火に師事し、昭和29(1954)年に同人となった。昭和54(1979)年、「星」を創刊主宰し、平成15(2003)年に終刊した。(『俳文学大辞典』949頁)

大津希水

大正4(1915)年生まれ。自註現代俳句シリーズ『大津希水集』(第4期13)(昭和56・11 俳人協会)がある。(国立国会図書館HP <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001547176-00> 2020・5・24日)

宮下翠舟

大正2(1913)年、東京生まれ。平成9(1997)年没。「馬酔木」を経て、昭和18(1943)年から「若葉」で富安風生に師事する。岸風三樓きしふうさんろう没後、「春嶺」を継承主宰した。(『俳文学大辞典』887-888頁)

寺田寅彦(寅日子)

明治11(1878)年、東京に生まれ、高知で育つ。昭和10(1935)年没。第五高等学校で夏目漱石に学び、俳句に熱中する。科学と文学を志し、吉村冬彦のペンネームを持つ随筆家、物理学者でもある。(『俳文学大辞典』594頁)

皆吉爽雨

明治35(1902)年、福井県生まれ。昭和58(1983)年没。「ホトトギス」で高浜虚子の指導を受けた。大正11(1922)年、「山茶花」の創刊で編集責任者に、昭和11(1936)年、選者になり、昭和19(1944)年の終刊まで続けた。昭和21(196)年、「雪解」を創刊主宰した。昭和53(1978)年、俳人協会副会長になり、昭和54(1979)年、勲四等旭日章を受章した。(『俳文学大辞典』883-884頁)

西本一都

明治38(1905)年生まれ。平成3(1991)年没。自註現代俳句シリーズ『西本一都集』(第2期29)(昭和53・7 俳人協会)がある。(国立国会図書館HP <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001385242-00> 2020・5・24日)

中村春逸が昭和30(1955)年に創刊した俳誌「白魚火」(島根県出雲市)を、昭和34(1959)年に同人として継承し、昭和38(1963)年に主宰となった。(「白魚火」HP <http://www.shirawobi.com/2012/hyoushi/prof.htm> 2020・5・24日)

Nasu in Haiku (2): The Influence of Westernization and Modernization

MATSUI Takako

Abstract

Nasu is the north-east district in Tochigi prefecture with a long history and famous for its splendid nature and hot springs. People in Nasu are much proud of their home place. The Imperial Japanese government promoted Japan's westernization and modernization during the Meiji era in the second half of the 19th century. The revolution affected daily life in Nasu and changed the calendar, clothes, and footwear.

Most of modern Haiku include kigo, seasonal words which express seasonal feelings. Kigo has cultivated traditional meanings with a long history and is an essential part of every haiku. Haiku poets faced civilization and enlightenment in the Meiji Restoration. They followed the change and varied the kigo.

Since the Edo period when haiku became more popular, many haiku poets have visited Nasu and described the natural value of the district with their haiku eyes. The haiku include both things in the modern and pre-modern era. The characteristic points of modernity in Nasu are cows and warhorses in stock farms and the Imperial villa.

Even in the 21st century, people in Nasu keep pre-modern lifestyles, and authentic Japanese feelings survive in traditional customs. In conclusion, things modern never reach to overwhelm things pre-modern in Nasu. So, Nasu haiku include both modernized and pre-modern feature.

(2020年11月2日受理)